

# 『真仏土卷』の根本問題について

ジョアキン モンテイロ

## (I) 真仏土の概念としての定義について

### (A) 『真仏土卷』における真実報土の記述について確認できること

私は、真宗の教学に対しての問題意識の一つとして、不明確なる諸概念の体系を明確にしたいと考えている。

『教行信証』のポルトガル語訳を『真仏土卷』から初めたということもこの私の問題意識と深く関わっている。

つまり、『教行信証』の持っている諸概念の体系が明らかになるためには、中心概念である真実報土、つまり真仏土から初めることは当然のことである。真宗教学の中心概念である真仏土が明確にならない限り、当然のこととして、『教行信証』の持っている諸概念の体系も明らかになるはずはないと考えられる。

『真仏土卷』の研究とポルトガル語訳の作業から私が確認できたことを三点でおさえるなら、次のようになる。

『真仏土卷』の根本問題について

謹<sup>テ</sup>按<sup>ニ</sup>真佛土<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>、佛者<sup>ハ</sup>則<sup>ニ</sup>是<sup>ハ</sup>不可思議光如来<sup>ナリ</sup>、土者<sup>ハ</sup>亦是無量光明土也。然則酬<sup>ニ</sup>報大悲ノ誓願<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>、曰<sup>ニ</sup>真ノ報佛土<sup>ト</sup>。既<sup>ニ</sup>而有<sup>レ</sup>願、即光明・壽命之願是也。

『大経<sup>ニ</sup>』言ク。「設我得<sup>レ</sup>レム<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>ラ<sup>ニ</sup>、光明有<sup>ニ</sup>テ能ク限量<sup>一</sup>下<sup>モ</sup>至<sup>レ</sup>ラ不<sup>ル</sup>ニ照<sup>ラ</sup>百千億那由他ノ諸佛ノ国<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>、不<sup>レ</sup>取<sup>ニ</sup>正覚<sup>ヲ</sup>。又願<sup>ニ</sup>言ク。「設我得<sup>レ</sup>レム<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>、壽命有<sup>ニ</sup>テ能ク限量<sup>一</sup>下<sup>モ</sup>至<sup>ラ</sup>百千億那由他ノ劫<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>、不<sup>レ</sup>取<sup>ニ</sup>正覚<sup>ヲ</sup>。」

願成就<sup>ノ</sup>文<sup>ニ</sup>言ク。「佛告<sup>ハ</sup>ハク阿難<sup>ニ</sup>。無量寿佛ノ威神光明、最尊弟一<sup>ニ</sup>シテ、諸佛ノ光明ノ所<sup>レ</sup>ナリ不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>及<sup>コト</sup>。是<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>無量寿佛<sup>ハ</sup>、号<sup>ス</sup>無量光佛・無辺光佛・無碍光佛・無对光佛・清浄光佛・歡喜光佛・智慧光佛・不断光佛・難思光佛・無称光佛・超日月光佛<sup>ト</sup>。其<sup>レ</sup>

有テ衆生ニ、遇<sup>マ</sup>ツ<sup>フ</sup>ス<sup>ル</sup>光<sup>ニ</sup>者<sup>ノ</sup>ハ、三垢消滅シ、身意柔濡ナリ、歡喜踊躍シ、善心生ス。若シ在テ三塗勤苦之處ニ、見<sup>バ</sup>此光明<sup>ヲ</sup>皆得<sup>ニ</sup>休息<sup>ヲ</sup>、無<sup>ケム</sup>復苦惱。寿<sup>ヲ</sup>終<sup>ヘテ</sup>之後、皆蒙<sup>ル</sup>解脱<sup>ヲ</sup>。無量寿佛ノ光明顯赫<sup>ニ</sup>シテ、照耀<sup>シテ</sup>十方諸佛ノ国土<sup>ヲ</sup>、莫<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>コト聞<sup>ヘ</sup>マ<sup>ス</sup>。不<sup>ス</sup>但<sup>シ</sup>我<sup>レ</sup>今<sup>マ</sup>称<sup>スル</sup>ニ其ノ光明<sup>ヲ</sup>、一切諸佛・聲聞・緣覺、諸ノ菩薩衆、咸<sup>ク</sup>共<sup>ニ</sup>嘆譽スルコト、亦復如<sup>シ</sup>是<sup>ノ</sup>。若シ有<sup>テ</sup>衆生<sup>ニ</sup>、聞<sup>テ</sup>其ノ光明威神功德<sup>ヲ</sup>、日夜<sup>ニ</sup>称說<sup>シ</sup>、至<sup>シテ</sup>心不<sup>レ</sup>バ断<sup>ヘ</sup>、隨<sup>テ</sup>意<sup>ノ</sup>所願<sup>ニ</sup>、得<sup>テ</sup>生<sup>ニ</sup>其ノ国<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>諸ノ菩薩・聲聞大衆<sup>ノ</sup>、所<sup>ラ</sup>レム共<sup>ニ</sup>嘆譽<sup>シ</sup>其ノ功德<sup>ヲ</sup>。至<sup>テ</sup>其<sup>レ</sup>然<sup>シテ</sup>後<sup>ヲ</sup>得<sup>ル</sup>佛道<sup>ヲ</sup>時<sup>ニ</sup>、普<sup>ク</sup>為<sup>ニ</sup>十方ノ諸佛・菩薩<sup>ノ</sup>、嘆<sup>ゼ</sup>ラレムコト其ノ光明<sup>ヲ</sup>、亦如<sup>キ</sup>メラムト今<sup>ノ</sup>也。佛ノ言<sup>ハク</sup>。我<sup>レ</sup>說<sup>ニ</sup>無量寿佛ノ光明威神、巍巍殊<sup>レ</sup>妙ナルヲ晝夜一劫<sup>ノ</sup>ストモ<sup>ホ</sup>尙未<sup>ダ</sup>能<sup>ハ</sup>盡<sup>コト</sup>。佛語<sup>ハク</sup>阿難<sup>ニ</sup>。無量寿佛<sup>ハ</sup>、壽命長久<sup>ニ</sup>シテ不<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>勝<sup>計</sup>ス汝寧<sup>知</sup>ラム乎。假使十方世界ノ無量ノ衆生、皆得<sup>テ</sup>人身<sup>ヲ</sup>悉<sup>ク</sup>令<sup>三</sup>成<sup>ニ</sup>就<sup>セ</sup>聲聞・緣覺<sup>ヲ</sup>、都<sup>ス</sup>バテ共<sup>ニ</sup>集會<sup>シテ</sup>、禪<sup>モ</sup>ハラ<sup>ニ</sup>シ思<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>シテ心<sup>ヲ</sup>竭<sup>ツ</sup>ツ<sup>シテ</sup>其ノ智力<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>二百千萬劫<sup>ニ</sup>、悉<sup>ク</sup>共<sup>ニ</sup>推<sup>サ</sup>ン<sup>シテ</sup>計<sup>ス</sup>其ノ壽命ノ長遠<sup>ノ</sup>數<sup>ヲ</sup>、不<sup>シ</sup>ト能<sup>ハ</sup>窮<sup>盡</sup>シテ知<sup>コト</sup>其ノ限<sup>極</sup>ヲ。」

〔教行信証・真仏土卷〕・〔真宗聖教全書二卷・百二十・百二十一頁〕  
今の「真仏土卷」の文章を分析すれば次の点がはつきりする。

(A-1) 「真仏土卷」で説かれる真仏土は「大無量寿經」四十八願

文の第十二願、光明無量の願と第十三願、壽命無量の願によって成り立っている。

(A-11) 真仏とは、第十二願、光明無量の願、また不可思議光如来として成り立っている。

真仏とは智慧を内容としている。

(A-111) 真土とは、第十三願、壽命無量の願、また無量光明土として成り立っている。

慈悲を内容としている。

(A-114) 願成就の文は第十二、十三両願を含んでいるということは、

真仏と真土は一つであることを示している。

(A-115) 無量寿仏の十二の別名の中には、無量光佛、智慧光仏と超

日月光仏とは特に大事な意味を持つている。

なぜなら、無量光として仏を名告ることは、仏を形として、言葉とし

て了解することを意味することである。

智慧光として仏を名告ることは、仏の本質は智慧であることを示して

いる。

超日月光として仏を名告ることは、仏の智慧が単なる自然現象なる日

月の光を超えているが故に自然の諸現象に対してはつきり区別すべきで

あるということを示している。

はつきりした超越観の立場に立った、仏教の自然主義的理解の全面的

な否定を意味している。

(A—六) 光明の中心的な働きとしては三垢(貪欲・瞋恚・愚痴)の消滅を述べている。

愚痴(無明)とは根本煩惱として、貪欲、瞋恚を含めた諸煩惱の因であるが故に、光明の働きを無明の消滅として明らかにしているのは間違いない定義である。

その意味では、真仏土は無明を消滅する働きを内容としている智慧と慈悲として厳密に定義できると考えられる。

『大無量寿経』の願成就の文より見ればこれ以外の意味が出て来ないからである。

(A—七) 最後に大事な点として注意したいのは、願成就の文の最後の部分にある仏の寿命と衆生の禪定力との関係である。

無漏善なる真仏土は有漏善なる衆生の禪定知力を超えているから、後者を以って前者を計ることができないことは当然のことである。

真宗そのものは無漏善なる仏智と有漏善なる衆生の禪定力との区別の上で成り立っているからである。

(B) 『真仏土巻』のポルトガル語訳より確認できたこと

『真仏土巻』のポルトガル語訳を私が行ってみて確認できたことを三点にまとめてとらえることができる。その三点というのは次のものである。

(B—I) 翻訳、特に思想書の翻訳というものは、全く異っている論理的構造と歴史的背景を持つている二つの言語の体系との関係の上で成立するものである。だから、翻訳の対象になっている書物の思想的問題性と諸概念の体系をある程度まで厳密化できないと翻訳が不可能になると考えられる。

その意味で、厳密な意味での仏教思想書である『教行信証』の単なる言語学的な意味での直訳は必然的に不十分な結果をもたらすであろう。なぜなら『教行信証』は単なる言語学的な意味での直訳を許さない書物であるからである。

(B—II) その意味では、『教行信証』の思想的課題性と諸概念の体系を明確にするために、真宗教学の持っている問題意識の思想的分析が必要である。

思想と思想史、教学と教学史を一つにする方法論にふまえた分析の中から初めて『教行信証』の持っている諸概念の体系が明確になると考えられる。

(B—III) 教学史にふまえた分析より見れば、『教行信証』の中心概念なる真仏土、真実報土の定義に関しての中心問題は有仏性・無仏性あるいは信心為本と悉有仏性との対立なのである。私にとっては、有仏性・無仏性論争の定義を明らかにするものとして真宗教学の中心問題であると考えている。これを明確にするために『教行信証』の『信巻』と『真

【真仏土巻】における【大無量寿経】と【涅槃経】との関係に對しての厳密な思想分析が必要である。

(C) 【真仏土巻】における【大無量寿経】と【涅槃経】との関係について

【真仏土巻】における【大無量寿経】と【涅槃経】との関係に關しての問題は七点としてとらえることができる。

七点というのは次のものである。

(C-I) 【大無量寿経】における仏身觀の特長は、仏相（報身仏）

として、形のある、言葉としてある仏なのである。【大無量寿経】には仏性と完全に矛盾する思想構造がある。

(C-II) そうした仏身觀から出て来る信理解とは機（無明・煩惱なる人間）と法（無漏業なる仏言・仏説）との間に成立する言葉をふまえた認識である。

機と法との関係は、主・客、能所関係として、認識論的な二元論としてある。

直接体験としての信なのではなく、言葉を通じた認識（聞信）としての信なのである。

(C-III) 【涅槃経】における仏身觀は逆に言語表現を超えた仏性（法

性・真如）なのである。

本来なる常楽我淨としての仏性なのである。

(C-IV) この仏身觀より出て来る信理解ということは主・客関係を越えた本来なる仏性、真如との直接体験なのである。

そうした体験は認識としての信なのではなく、本来なるものの容認（解信）としてあるものである。

機と法との関係は、機（無明煩惱なる人間）と法（仏性・法性）との間にある相対的な二元論を含む絶対的、存在論的な一元論（生仏不二）としてある。

(C-V) いうまでもなく【大無量寿経】と【涅槃経】の持っている思想構造は全く矛盾している、共存できない、全然異質な思想構造なのである。

(C-VI) その中から【真仏土巻】を読む正反対の方法論的な方向性

がはっきり見られる。

というのは、【大無量寿経】の思想的立場より【涅槃経】を読むということと逆に、【涅槃経】の思想的立場より【大無量寿経】を読むということとの二つなのである。

(C-VII) 前者を選び取ると善導大師の【観経疏・玄義分】の引文より【真仏土巻】を中心的に読むことになる。【観経疏・玄義分】の報身

積の立場より【真仏土巻】を了解することになる。

後者を選び取ると、【涅槃経】の引文より【真仏土巻】を中心的に了

解することになる。

先の展開より見れば真仏土の概念としての定義に関する中心的な問題性が明確になったといえる。

根本問題としては、「大無量寿経」の立場による真仏土<sup>11</sup>報身仏と「涅槃経」の立場による真仏土<sup>12</sup>仏性との定義の矛盾なのである。

この問題意識を中心に真宗教学史的分析をこれから展開したいと考える。この分析の内容を三点としてとらえることができる。

(A) 前者の立場（「大無量寿経」を中心にした立場）の代表者として存覚上人の「六要鈔」を分析する。

(B) 後者の立場（「涅槃経」を中心にした立場）の代表者として「相伝義書・深義別伝」を分析する。

(C) 最後に「教行信証」の思想構造的な分析にふまえて私の理解を述べる。

## (II) 「六要鈔」における「真仏土巻」理解について

私はこの題の下に、三の問題点を以って存覚上人の「六要鈔」における「真仏土巻」理解を分析したい。

### (A) 「六要鈔」における教学的方法論

「真仏土巻」の根本問題について

存覚上人は「六要鈔」の中では、浄土三部経、浄土教の伝統に属する

論釈、そして「瑜伽論」、「智度論」、「俱舍論」のような大小乗の論を非常に広く引用しているけれども、「教行信証」を読む中心的立場と方法論を必要になるほどそれは明確にされていない。

私からすれば、「六要鈔」の思想的方法論と中心の問題意識を明確にするということはこれからの真宗教学史、真宗思想史にとって非常に大事な研究の課題になると考えている。

(B) 「六要鈔」における「大無量寿経」と「涅槃経」の間にある関係に對しての理解

「大無量寿経」と「涅槃経」の間にある教学的關係は「六要鈔」の「真仏土巻・積」の中でもとても明確な問題意識として表れている。

たとえば「六要鈔」の「真仏土巻・積」の中で存覚上人は次のように述べている

次ニ「涅槃経」文、問。此ノ經ハ、聖道為聖ノ之説、非ズ今ノ所依ニ、隨而所引ノ經文ノ之中ニ無シ一句トテ、而説ク浄土ニテ文上何ソ引レ之乎。答。雖レ為ト聖道所依之經、如來ノ教法元無ニナルガ故ニ、二門雖レハ異ナリト和會スレバ、無レ違スルコト、集主ノ御意深ク達レ此ノ義ニ明ニ了ス彌陀ノ名義功德全ク為トテ、涅槃無上ノ極理、以テ此ノ義一故ニ明ニ了ス

眞佛土極談ノ己證ヲ、故ニ被三引ニ用セ「涅槃ノ」妙文ナリ。於下マテ第三ノ本ニ被三引ニ用セ彼ノ經ノ下ニ粗述ベ義ヲ畢ヌ。閑ニ案ズルニ「大經」一部ノ説相ヲ、彌陀ノ功德ヲ説テ為ニ五智ト、五智ノ功德ヲ説テ為ニ無上ト。其ノ經文ニ云。「於此ノ諸智ニ疑惑シテ不レ信セ、然モ猶信ジ罪福一修ニ習善本一此ノ諸ノ衆生ヲ彼ノ宮殿ニ壽五百歳。其レ有テ菩薩一生ニ疑惑ラ者ハ、為レ失ニト大利ヲ、是ノ故ニ應シ當ニ明ニ信ズ諸佛無上ノ智恵ヲ。」又云。「其レ有下ラン得レテ聞ニ彼ノ佛ノ名號ヲ、歡喜踊躍シテ乃至一念上。當レ知此ノ人ハ為レ得ニト大利ヲ、則是具ニ足スル無上ノ功德ヲ。」今所レ言ノ無上智恵・無上功德、是則無上涅槃ノ之義ナリ。言「智恵ト」者ハ於テ三徳ノ中ニ且ク擧グ般若ヲ、此ノ中ニ即具ス法身・解脱ノ徳ヲ。阿彌陀ト者即為ニ三徳ノ祕藏一故ニ、彌陀ノ佛智ヲ既ニ云ヒ無上ト、涅槃ノ極理ヲ又云フ無上ト。二種ノ無上其ノ躰是レ一ナリ。自餘ハ皆是レ有上ノ之法ナルコト其ノ義必然ナリ。「瑜伽論ニ」云ク。「復次ニ云何ナルカ有上ノ法、謂ク除テ涅槃ニ餘ノ一切ノ法ナリ。又諸法ノ中ニ大般涅槃ヲ為ニ無上ト義、見ニ「智度論」ニ。凡ソ大師ノ意、名號ノ功德即涅槃ノ徳ナリ。「法事讚」ニ云ク。「極樂ハ無為涅槃ノ界ナリ、隨縁ノ雜善恐ハ難レ生ジ、故ニ使ム下如來選テ要法一教ヘテ念ニ彌陀ヲ專ラニシテ復專上ナリ。」今此ノ一偈、既ニ讚シテ極樂ヲ以テ為ニ無上涅槃ノ界ト、而モ云テ隨縁ノ雜善難ト生ジ、惠念彌陀ヲ以テ為ニ生因ト。故ニ知ヌ、所レ遮スル雜善等者、有上ノ法ナルカ故ニ不レ生セ涅槃無上ノ之土ニ、唯勸ニ稱名ヲ以ニ無上ノ法可フ

生ニ涅槃無上ノ土ニ故ニ。以レテ言レ之ヲ、阿彌陀ト者涅槃ノ名號ナリ、故ニ處々ノ釋皆顯ニスラク涅槃彌陀一法ノ之深旨ヲ耳。

〔眞宗聖敎全書〕二卷・三五〇・一頁

今ノ文章を分析すると次の問題点を明らかに見える。

(B-I) 「六要鈔」の中には「大無量壽經」と「涅槃經」の間に矛盾を認めない敎学的立場の不徹底さがあるとしても、少なくとも「涅槃經」の立場より「大無量壽經」を読む方法論を取らない。「涅槃經」の仏性、法性を「大無量壽經」の基礎付けにしない。

「涅槃經」を引用する時に「大無量壽經」の涅槃の義の単なる説明として引用しているのである。

(B-II) 「六要鈔」の「眞仏土卷・釈」の中には「涅槃經」の引用文をほとんど強調しない立場がはつきり見える。

「涅槃經」の仏性よりも、善導大師の「觀經疏・玄義分」の報身仏を重んじている。

(B-III) 阿彌陀仏と無上涅槃の同一性を強調しているとしても阿彌陀仏を涅槃の名号、言葉として働く涅槃として了解している。

「六要鈔」における眞仏・眞土とは言葉を越えた離言眞如、仏性なのではない、名号として、言葉として働く無上涅槃の智慧である。

阿彌陀仏は離言眞如、言語道断の法性ではないということである。

(C) 【六要鈔】における報身仏理解・「観経疏・玄義分」を中心に

先に述べたように「六要鈔」の立場より見た真仏・真土は離言真如・言語道断の法性として了解された仏ではなく、言葉としてある、無上涅槃の名号として働く報身仏として了解された仏なのである。

【六要鈔】の真実観には言葉で離言真如の自己表現として見ているのではない。言葉が報身仏として真実そのものとして見ているのである。

この考え方は、いうまでもなく善導大師の「観経疏・玄義分」を中心にした「真仏土巻」理解なのである。

【観経疏・玄義分】の立場より見れば阿弥陀仏は、報身仏として、言葉なる涅槃の名号として、真実の自己表現なのではない。真実そのものなのである。「観経疏・玄義分」の立場を徹底すれば、法身を立てる意味も、必要も無くなるのである。

これについて存覚上人は「六要鈔」の「真仏土巻・釈」の中で次のように述べている。

問。佛ニ有リ三身一、即法・報・應ナリ、何ゾ除テ法身一問ニ報・化ヲ耶。又依ラバ三身ニ應ノ中ニ攝レス化、若シ依ラバ四身ニ應ノ外ニ立ニ化ヲ、何ゾ不レ言レ應直ニ云レ化ト耶。答。三身・四身・二身・一身、開合ノ不同ニク、實ニ不ニ増減一法身及ビ土ハ離ニ其ノ名相ヲ。依ニ其ノ三身

【真仏土巻】の根本問題について

相即ノ理一故ニ、言ニ報化ノ身一必具ニ法・應一。且ク依テ合ノ門ニ立ニ報・化ノ身一。

浄土宗ノ意ハ指方立相ニシテ、法ヲ屬スルガ報ニ故ニ別ラ不レ舉レ之ヲ、應興レト化同シ、故ニ舉テ報・化一其ノ義為レヌト。

真ニ含シ法・報一トテ化ニ攝ス應身一、約テ此ノ義邊ニ言ニ報・化ト也。況又古今諸師ノ異解皆在リ報・化ニ、故ニ今又同シ。

〔真宗聖教全書〕三五九頁

今の文章を分析すれば、次の問題点が見える。

(C-I) 【六要鈔】の立場は、確かに法身を否定するラディカルな結論まで行かないけれども、法身より報身を強調して、報身を中心に浄土教を考えているに間違いない。

最後まで形のある、言葉としてある報身仏を徹底的に強調しているのである。

(C-II) 法・応二身をはっきりと報・化の中に摂っている。法身には特別な意味を与えていない立場に立っている。

(C-III) 最後に、結論としていわなければならないのは「大無量寿経」より「涅槃経」を読む教学的な立場に立っている、逆なのではない。

【六要鈔】の立場より見れば「涅槃経」の仏性(法身)は、絶対に「大無量寿経」の仏相、如来の相(報身)の基礎付けにならない。

『六要鈔』の立場の根本的な不徹底さは、逆に『大無量寿経』と『涅槃経』の間にある対立、矛盾を認めない処にある。

名号に依る法身の否定までラディカルに浄土教の立場の徹底化まで至れなかった処に『六要鈔』の思想的限界がはつきり見えるのである。

(III) 『真宗相伝義書・深義別伝』における『真仏土巻』理解について

『深義別伝』の『真仏土巻』理解を『六要鈔』と同じような形で三点を以って分析してみると次のようになる。

(A) 『真宗相伝義書・深義別伝』における教学的方法論

私は『真宗相伝義書』を全体系として研究したことはない。けれども『深義別伝』と『広本要訣』に限って見ると、間違いなく『六要鈔』と比べて非常に明確な教学的方法論を持っている。

始めから終りまで連続している非常に明確な方法論の展開が感じられる。

これは『相伝義書』の一番強い処といえるかもしれない。

『相伝義書』における教学的方法論を二点でとらえると次のようになります。

(A-I) 第一点としては『浄土文類聚鈔』より『教行信証』を読む処にある。

この方法論は伝統的に伝わっているけれども、私はこれの持っている内容と必然性をまた十分に了解できていないのである。

(A-II) 第二点としては『大乘起信論』より『教行信証』を読む処にある。

私より見ればこれは『相伝義書』の一番中心的な立場であると考えている。極端ないい方をすれば『相伝義書』とは『大乘起信論』の立場より解釈された『教行信証』を根本にしている教学の全体系である。

これについて『深義別伝・真仏土巻・釈』の中で次のように述べている。

相師御引用の御意趣は、『起信』の真如の説相、即ち上来の仏性涅槃の義なり。『起信』の真如というも、弥陀引証の法門、従如来生の本を説くなれば、自力他力と法門は替わりたれども、性説弥陀の教意より開闡したまうときは、本願海中の法門ならね事なきゆえに、馬鳴大士の密意を探って、『宝王論』によって例証したまうなり。

(『真宗相伝義書』三巻・百五十九頁)

また『深義別伝・教巻釈』の中で



「法蔵」とは、「法」は法則なり。軌として物の解を生ずるを「法」と各づく。

すなわち、人々所具の一心法、又、仏のさとり御名なり。【起信論】に云く、

「一切ノ法ハ、本ヨリ来コノカタ、唯ノミ心ニシテ実ニハ無キモ於念一而有二妄心一、不覺ニシテ起シテ念ヲ、見ニ諸ノ境界一故ニ説ク無明ト」文。

無差別の一心法の当体には、凡聖の隔てなし。その一心真如を縁起する万法の上には、差別あり。「無明法性異れど、心はすなわち一つなり。この心すなわち如来なり。この心すなわち他力なり」、「罪業もとよしかたちなし。妄想顛倒のなせるなり。心性もとよきよけれど。この世はまことの人ぞなき」

迷悟染浄、二法の御指南、これに過ぎず。この凡聖不二無差別の処をさして一心法といえ、自力にして、聖道を学ぶ凡機としては、断惑証理して真如の妙理には叶いがたし。それが為、仏もと本願を立てましまして、機法もとより本願に成就して他力の信道を導き、仏体果上に成就なされてある功德の宝を施すことを致すなり。無明と法性と裏表になるは、聖浄二門通じて同じきなり。然るに聖道門の心は、智慧をみがいて行者の心より如来蔵にかなう、他力の法門は「為衆開法蔵」の大悲から今日行者の信心と発起せしめたまう、自力、他力の分ちなり。

【真仏土巻】の根本問題について

その他力の一すじをもつて、本の本願にかなえしむるばかりなり。ここを以つて、その無差別の一心にかなえしむるを本願としたまえる旨を明しますが、「教巻」の大意なり。

【真宗相伝義書】三巻・十六・十七頁

この文章を分析すれば次の問題点をはつきり見える

(A—Ⅲ) 【大乘起信論】の立場より【教行信証】を解釈しているに間違いない。【起信論】の一心を以つて【大無量寿経】の大悲の基礎付けをしていることも間違いない。

(A—Ⅳ) 機と法との関係を無明と法性の関係として了解している。法を法性真如として撰っている。

(B) 【真宗相伝義書・深義別伝】における【大無量寿経】と【涅槃経】の間にある関係に対しての理解

【六要鈔】と同じような意味で【深義別伝】の【真仏土巻・釈】の中には【大無量寿経】と【涅槃経】の間にある教学的な関係がとても明確な問題意識として表れている。

たとえば【大無量寿経】の【真仏土巻・釈】の中には次のように述べられている

『涅槃經』の引証は、真仏真土の仏性を示すなり。何ゆえに此の『涅槃』を引くぞなれば、正依の經には、仏の相を説くといえども、性をば説かず。性の方を明す日には、いつとても涅槃から明さねばならぬなり。

〔真宗相伝義書〕三卷・百五十頁

また

『涅槃經』に十三文あり。総じて上の依經異釈の文は、真仏土の相状を開くについて、光寿無量の二願、同成就の文、光明土の經説を挙げたまう。本經所説の報身仏の相、これらの文にあり。その余の淨土莊嚴の相は、多く化に寄せて報の妙相を明さるるなり。故に當卷に引用まします。真仏土の相を挙ぐるときは依經なり。その性を明すことは、『涅槃經』にあり。

〔真宗相伝義書〕三卷・百五十一頁

また

當卷、顕真仏土なれば、真仏土を明すということは誰れも合点なり。その身土と云うものを、相をとどめてこれぞと云うとおもわば誤りなり。真仏土というものは如来の性なり。その性を開くは、是非に、『涅槃經』の文からでなければならぬなり。

〔真宗相伝義書〕三卷・百五十三頁

また『広本要訣』の中には次のように述べている

色もなく形もなく、言語道断、心行所滅せるがゆえに、難思議往生という。みな本願力廻向不思議の御さとりなりと。

〔真宗相伝義書〕三卷・二百頁

また

これ言語道断、心行所滅ただ不可思議なり。

〔真宗相伝義書〕三卷・二百四頁

今の引用文を分析すれば、次の問題点がはつきり見える。

(B-1) 『大無量壽經』の如来の相(報身)と『涅槃經』の如来性(法性・真如)を区別した上で後者を真仏土としてあつかっている。

その意味では『涅槃經』を以って『大無量壽經』の基礎をとっているから『涅槃經』の立場より『大無量壽經』を解釈する教學的方法論をとっているに間違いはない。

『涅槃經』と『大乘起信論』は非常に近い如来蔵(如来性)的思想構造を共通にしているから、『深義別伝』の『教行信証』理解は如来蔵的

であるといわざるをえない。

(B―II) 名号として、言葉としてある報身仏に対して、如来性なる真仏土を言語道断であるとはつきりいつている。「深義別伝」の立場より見れば、真仏土には言葉はないということである。

(C) 「真宗相伝義書・深義別伝」における報身仏理解・「観経疏・玄義分」を中心に

「深義別伝」には「涅槃経」の如来性を中心にした「真仏土巻」理解が明確にあるから「観経疏・玄義分」における報身仏理解を全然強調しないのは当然のことである。

「観経疏・玄義分」の報身仏理解の正反対の立場を取っているからである。

これに対して「深義別伝・真仏土釈」の中の唯一つの意義のある表現として次のように述べている。

「非化品」の文相、当巻の上「涅槃経」を引きたまう御意趣、何い合わすべし。

〔真宗相伝義書〕三巻・百五十六頁

(C―I) これに対しての唯一つの問題点としては、明らかに「涅槃

真仏土巻」の根本問題について

経」の立場より、「観経疏・玄義分」、特に如来蔵と矛盾している「非化品」の空思想を読むべきであると強調しているのである。

(V) 「真仏土巻」における「大無量寿経」と「涅槃経」との関係に関する私見

最後に「真仏土巻」における「大無量寿経」と「涅槃経」との関係に關しての私の了解を述べる。

私は、はっきりと「大無量寿経」の立場より「涅槃経」を読むことは唯一つの正しい方法論であると考えている。これに対しての理由を二つあげる。

一つは「教行信証」は全体として「大無量寿経」を真実教、唯一つの了義教として選び取ることに由って成り立っているからである。

「教行信証」を根本的に顕教なる「大無量寿経」の論として了解しているからである。

もう一つは「教行信証」の「真仏土巻」か「信巻」における親鸞聖人の「涅槃経」の読み変えの方向性はこれを証明しているからである。この点を中心にして「真仏土巻」の分析を展開する方法論を考えているのである。

(A) 「真仏土巻」における親鸞聖人の「涅槃経」の読み変えの意味に

ついて

親鸞聖人は「真仏土卷」の中には「涅槃經」の読み変えを沢山しているけれども、思想として、教学として特別な意味を持っているのは二つである。

(A-I) 無為、無漏法の能動性についての文

原文・非<sup>二</sup>作所作<sup>一</sup>・作所作に非ず。

今の「涅槃經」の原文における読み方には無為、無漏法には作所作に

非ずものとして能動性、能動的な動きを根本的に否定する立場がある。

これに対して親鸞聖人の読み変えは次のようである

非作ノ所作<sup>ナリ</sup>・非作の所作なり

この読み方より見れば無為無漏法(非作)には根本的には能動性、働きを(所作)認める立場があるといわざるをえない。

(A-II) 眼見と聞見に関する文

眼見(解信・離言なる本来的なるもの)の容認・直接体験)と聞見(機と法との間に成立する言葉を通した認識)の関係は「真仏土卷」における「涅槃經」の読み変えの中心問題であると考えられる。

【教行信証】全体の中心問題であるといってもいいのである。

つまり、衆生に眼見の可能性を認めるということは「涅槃經」の解信の立場を選び取ることを意味し、真仏土、真実報土を法性、仏性として

定義することを意味するのである。

逆に衆生に眼見の可能性を否定することは「大無量壽經」の立場なる聞信・聞見を選び取ることを意味し、真仏土、真実報土を報身仏として定義することを意味するのである。

これは、間違ひなく「真仏土卷」理解に対しての中心問題である。

原文・復有<sup>二</sup>眼見<sup>一</sup>。諸仏如来・十住菩薩、眼<sup>二</sup>見仏性<sup>一</sup>。復有<sup>二</sup>聞見<sup>一</sup>。

一切衆生乃至九地、聞<sup>二</sup>見仏性<sup>一</sup>。

復眼見有り。諸仏如来・十住菩薩、仏性眼見。復聞見有り。一

切衆生乃至九地、仏性聞見。

今の「涅槃經」の原文を分析すれば、はっきりと九地に至るまでの衆生には眼見の可能性を否定しておりながら、十住の菩薩にはその可能性を認めている。

十住の菩薩は諸仏・如来と同じように眼見の可能性を持っている。十住の菩薩は衆生であるが故に今の文は衆生に眼見の可能性を認めていることは間違ひないことである。

これに対して親鸞聖人の読み変えを見ると

復有<sup>二</sup>眼見<sup>一</sup>。諸仏如来<sup>ナリ</sup>。十住ノ菩薩ハ、眼<sup>二</sup>見仏性<sup>一</sup>ヲ復有<sup>二</sup>聞見<sup>一</sup>スルコト。

一切衆生乃至九地<sup>マデ</sup>ニ聞<sup>二</sup>見<sup>ス</sup>仏性<sup>ヲ</sup>。

復眼見有り。諸仏如来なり。十住の菩薩は仏性を眼見す。

復聞見すること有り。一切衆生乃至九地までに仏性を聞見す。

今の文を分析すると間違いなく、十住の菩薩の眼見の可能性を全面的に否定する処はないとしても、眼見を諸仏如来に限定する方向性がはっきり見えるのである。

少なくとも、聞見を強調するような『大無量寿経』的な立場より『涅槃経』を読んでいることは間違いはない。

(B) 『真仏土巻』における仏性について

今までの分析の全体から見ると真仏土を報身仏、無漏業なる仏言として定義することは当然の結果に見られる。

真宗教学における仏性とは本来なる離言真如、あるいは衆生に内在している成仏の可能性を意味しているのではなく、諸仏如来の言葉なる無漏業を聞思することによって衆生の上で成立する智慧を意味するのである。

ただ仏性の概念としての定義より見れば、諸仏如来の言葉より衆生にたまわった智慧ということはどう仏性といえない。

その意味では真宗教学には仏性という言葉があるにもかかわらず仏性の概念はない。

『教行信証』には仏性、信心仏性という言葉があるとしても、仏性の概念がないが故に、仏性を真宗教学の概念として定義することは大きな誤りであるといわざるをえない。

『真仏土巻』の根本問題について

(C) 報身仏として定義された真仏土と教行信証四法との関係・『教行信証』の思想構造に関する私見

真実報土、真仏土とは無明を破する無漏業として、真実の智慧として真実信心の内容であるが故に信心を離れて真仏土を了解できないと考えられる。

真実信心ということは『大無量寿経』なる真実教と諸仏の歴史なる大行を客観的な背景としており、教行を聞思することによって成立し、真実の智慧なる真実証を内容としている。

この立場より見れば真仏土は教行信証四法の超越的な根拠づけということよりも教行信証四法の内容なのである。

この立場を信心が具足する三つの条件として細く展開できると考えられる。三つの条件というのは次のものである。

(C-1) 信心の歴史的、客観的な背景としての教と行。

復マタ有リ二種、一ニハ信有レ道、二ニハ信ニ得者ヲ。是ノ人ノ信心、

唯信レテ有レ道、都スベテ不レラム信レセ有レ二得道之人。是ヲ名テ為レ信不

具足ト。

〔教行信証〕・〔信巻〕・真宗聖教全書・二巻・六十三頁

得道の人の問題ということは釈尊出世の本懐より開いた諸仏の歴史（真実行）と、その意味内容としての『大無量寿経』（真実教）とが、信心の歴史的、客観的な背景であるということを中心にするためでもある。もちろん親鸞聖人にとっては三国七高僧の歴史ということは初めから自明事実として受けとめていたのではない。自分の仏教聞思の歩みの中から結果として明らかになったものとして受けとめていたに違いない。

ただ大事なものは、客観的、歴史的な背景なる教行を抜きにしては真実信心が成立しえないということである。

(C-11) 教行を聞思することによって成立する信心

信ニ復有リ二種、一ニハ從レリ思生ズ。是ノ人ノ信心、從レヨリ聞而シテ生ジテ不ニ從レヨリ思生ゼ、是ノ故ニ名テ為ニ信不具足一。

〔教行信証〕・〔信卷〕・真宗聖教全書・二卷・六十三頁

信心は聞思によって生ずるということは、仏の言葉としての名号は意味として存在するということを意味している。

信心の智慧が成立するための増上縁なる名号は真言密教と違って意味として存在するのである。信心とは機（無明・煩惱なる人間）と法（教法）との間に成立する言葉を通じた認識として定義するならば、仏言を意味としてとらえる他ないと考えられる。

信心の構造を正しく了解できるためにはもう一つの大事な点がある。

というのは断善根、一闍堤として機を了解することである。

親鸞聖人の人間観より見れば、人間は断善根として出世の善根を全く持たないが故に無明、煩惱を逆転するために釈迦、諸仏の教えを聞思する以外にない。

この人間観について、親鸞聖人は、『真仏土卷』の中で次のように述べている。

如シ汝所レ言フ一闍堤ノ輩ノ、若シ有レドモ身業・口業・意業・取業・求業・後業・解業・如レ是等ヲノ業、悉ク是邪業ナリ。何ヲ以ノ故ニ、不<sub>一</sub>ルガ求<sub>二</sub>因果<sub>一</sub>ヲ故ナリト。善男子、如シ訶梨勒ノ果・根・莖<sub>一</sub>キカウ・枝<sub>一</sub>・葉・華・實悉ク<sub>ニ</sub>苦<sub>一</sub>。一闍堤ノ業モ、亦復如シ是ノ。

〔教行信証〕・〔真仏土卷〕・真宗聖教全書・百二十八頁

信心そのものの内容とは、釈迦、諸仏の教えを聞思することによって無明を逆転する智慧（見道）を現生において成就するのである。

聖道門仏教の修道を通して断じられる諸煩惱が死ぬまでなくならないけれども、現生において無明を逆転する見道が成就するのである。

親鸞聖人は、これに対して『教行信証』の『信卷』の中で次のように述べている。

言レフ断ト者ハ、發<sub>二</sub>起<sub>一</sub>スルガ往相ノ一心ヲ<sub>一</sub>故ニ、無<sub>二</sub>生<sub>一</sub>ト而シテ當ニ受レク生ヲ、無<sub>二</sub>趣<sub>一</sub>ト而シテ更マタ應レベキ到<sub>レ</sub>趣<sub>一</sub>。一己ニ六趣・四生因亡<sub>一</sub>マウラジ

果滅ス、故ニ即頓ニ断ニ絶ス三有ノ生死ヲ。故ニ曰フ断ト也。四流者ハ、則チ四暴<sup>ゴ</sup>流ルナリ、又生・老・病・死也。

〔教行信証〕・〔信卷〕・真宗聖教全書・二卷・七十四頁

(C-III) 信心の内容なる証・真偽勘決の智慧

有リ二種、一者信正、二者信邪ナリ。言<sup>下</sup>ハ有リ因果<sup>一</sup>有<sup>中</sup>佛・法・僧上  
是ヲ名ニ信正ト。無<sup>ト</sup>因果三宝ノ性異、信<sup>スル</sup>諸ノ邪語<sup>フ</sup>富蘭那等<sup>ヲ</sup>、  
是ヲ名ニ信邪ト。

〔教行信証〕・〔化身土・本卷〕・真宗聖教全書・二卷・百六十二頁

據<sup>ニ</sup>諸ノ修多羅<sup>ニ</sup>勘<sup>ニ</sup>決<sup>ニ</sup>真偽<sup>ヲ</sup>、教<sup>ニ</sup>誠<sup>セ</sup>外教邪偽ノ異執<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>、〔涅槃  
經<sup>ニ</sup>〕言<sup>ハ</sup>ク。歸<sup>ニ</sup>依<sup>セ</sup>於<sup>レ</sup>佛者<sup>ハ</sup>、終<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>更<sup>マ</sup>ク歸<sup>ニ</sup>依<sup>セ</sup>其<sup>ノ</sup>餘<sup>ノ</sup>  
諸ノ諸天神<sup>ニ</sup>。

〔教行信証〕・〔化身土・未卷〕・真宗聖教全書・二卷・頁七十五頁

信心の内容なる真実証というのは、真仏土と化身土、真・仮・偽を正しく分別判断する智慧である。その中から真・仮・偽の定義としては

(真) 真というのは帰依三宝の世界である。

仏(仏宝)の教え(法宝)を聞思することによって、無明を逆転する智慧をいただく時に僧伽(僧宝)の一人として誕生することである。

これに対して、親鸞聖人は「教行信証」の「信卷」の中で次のように述べている。

言<sup>ニ</sup>眞佛弟子<sup>ト</sup>者<sup>ハ</sup>、眞<sup>ノ</sup>言<sup>ハ</sup>對<sup>シ</sup>レ偽<sup>ニ</sup>對<sup>レ</sup>假<sup>ニ</sup>也。弟子<sup>ト</sup>者<sup>ハ</sup>、釋迦諸佛

「真仏土卷」の根本問題について

之弟子ナリ、金剛心ノ行人也。由<sup>テ</sup>斯ノ信行ニ必<sup>ズ</sup>可<sup>ガ</sup>超<sup>ニ</sup>證<sup>ス</sup>大涅槃<sup>一</sup>故<sup>ニ</sup>、曰<sup>フ</sup>眞佛弟子<sup>ト</sup>。

〔教行信証〕・〔信卷〕・真宗聖教全書・二卷・七十五頁

(仮) 仮というのは親鸞聖人の教相判釈には批判の対象なる仏教の諸教、諸宗なのである。

仏教の仮面を取った外道として批判の対象になっている諸教、諸宗なのである。

これに対して親鸞聖人は「教行信証」の「信卷」の中で次のように述べている

言<sup>レ</sup>假<sup>ト</sup>者<sup>ハ</sup>、即是聖道ノ諸機、淨土ノ定散ノ機也。

〔教行信証〕・〔信卷〕・真宗聖教全書・二卷・九十頁

(偽) 偽というのは信心の批判対象としての諸外道、外教なのである。

これに対して親鸞聖人は「教行信証」の「信卷」の中で次のように述べている。

言<sup>レ</sup>偽<sup>ト</sup>者<sup>ハ</sup>、則六十二見、九十五種之邪道是也。

〔教行信証〕・〔信卷〕・真宗聖教全書・二卷・八十頁